

災害文化研究 6 号研究ノート

# 戦時体制確立期に尋常小学校で編纂された教育資料にみる防災と人権 -田老村津波誌と田老村郷土教育資料が語るもの-

山崎 憲治

- 章立て
- I はじめに
- II 1930年代とは：世界、日本、岩手県、田老村から位置づけてみる
- III 教育統制と民間教育運動
- IV 昭和三陸大津波と津波誌
- V 郷土研究
- VI おわりに

# 1 はじめに

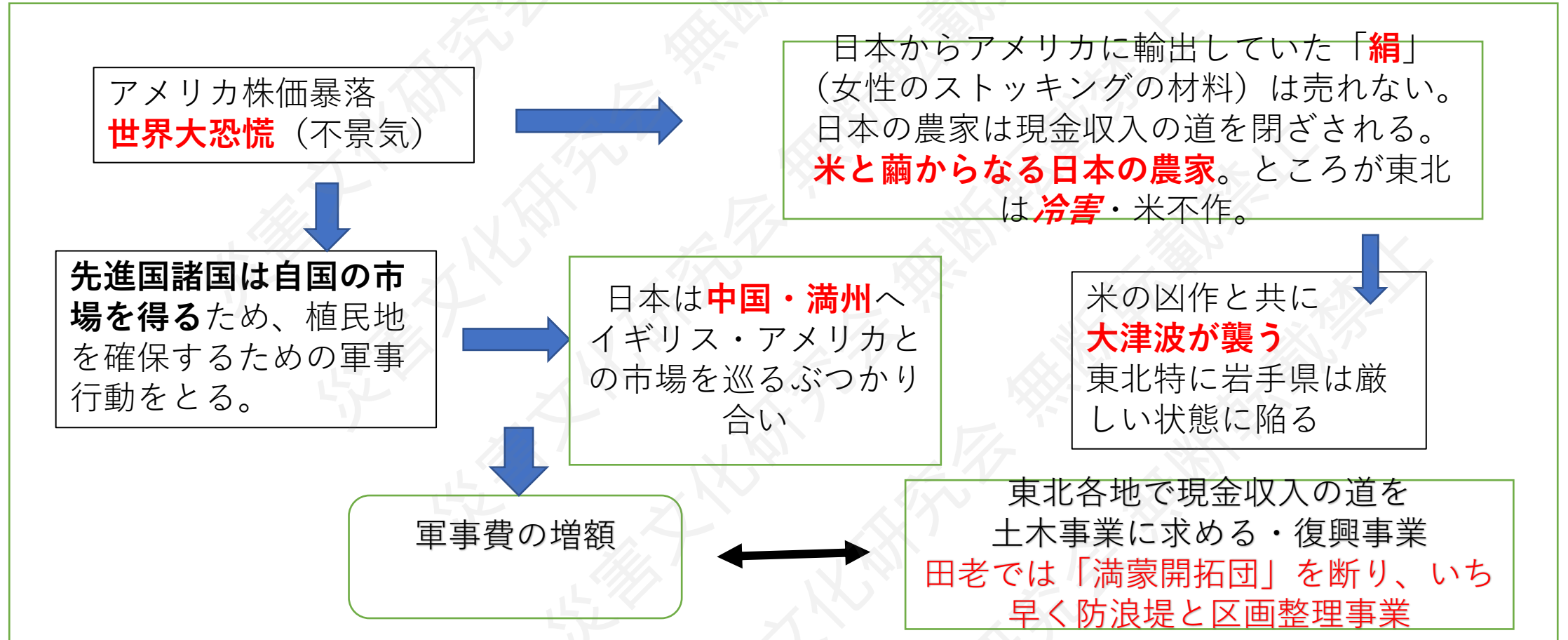
- 1930年代を東北、田老村から位置づけてみたい
- 「村」で尋常小学校が果たしていた役割
- 教師が担ったこと、津波誌、郷土研究資料が示す事実が何をもたらしたか。
- 田老津波誌の牧野アイの作文、郷土研究資料の女子教員が記した田老の乳幼児死亡と婦人の生活・労働の実際

II 1930年代とは：世界、日本、岩手県、田  
老村から位置づけてみる

# 昭和の大津波が襲った時代は

- 1929（昭和4）年：世界大恐慌……絹の暴落・・・農家の現金収入減
- 1930（昭和5）年：ロンドン軍縮会議・・米価下落
- 1931（昭和6）年：「満州国」建国・・・・米凶作
- 1932（昭和7）年：ドイツ、ナチ第1党・・米不作
- 1933（昭和8）年：中国への進攻、国際連盟脱退、**大津波発生**  
米豊作だが価格低下・豊作貧乏
- 1934（昭和9）年：**米大凶作**・ヤマセと室戸台風、東北地方で救助必要な農家34万戸221万人。大量の欠食児童出現。  
現金収入得る土木事業を求める。

# 大恐慌のあと東北を凶作と津波が襲う



# 戦争への道をすすむ 1930年代後半

- 1935（昭和10）年 天皇機関説問題、国体明徴の強調
- 1936（昭和11）年 2.26事件、イタリアのエチオピア併合
- 1937（昭和12）年 文部省『国体の本義』、政府『我々は何をなすべきか』、朝鮮では『皇国臣民の宣誓』を配布、
- 盧溝橋事件から南京侵略へ
- 1938（昭和13）年 労農派大内兵衛検挙、鶴彬獄死、国家総動員法
- 1939（昭和14）年 ノモンハン事件、9月ドイツのポーランド侵略、
- 次いでソ連ポーランド、北欧へ侵略
- 1940（昭和15）年 日独伊三国同盟

# 朗惺寺（武蔵小山駅から徒歩5分すぐ）

慰霊碑



# 荏原郡満州開拓団殉難者慰霊碑



1943年商店街を解散し、商売を「奉還」活路を満州に、13次興安東京荏原郡開拓団として約1300名が向かう。

1957年慰霊碑を建てるが、生存して帰還でき名前を載せることが出来た人、僅か25名。それもすべて男である。



### III 教育統制と民間教育運動

- 1929年国民強化運動、国体明徴強調。
- 1932年上智大学靖国参拝拒否、配属将校引き上げ。文部省は生徒の校外生活指導強調・上意下達の服従型行動様式強調。
- 1933年小学国語読本改定。
- 1937年文部省思想局『国体の本義』
- 1938年師範学校教授要目改正、地理を愛国心の涵養に資すともに地方研究を進め愛郷心の養成に向かう、と規定。
- 1940年皇紀2600年歴史的事実の根拠のない年号、国民相互監視体制。綴り方教育を進めた教師が全国で300名検挙。

# IV 昭和三陸大津波と津波誌

1933年昭和の大津波に関する報告書						
地域	田老	大槌	吉里吉里	鵜住居	釜石	小白浜
名称	田老村津波誌	昭和八年三月三日大槌海嘯略誌	皇紀二五九三年三月三日震災誌	郷土資料海嘯誌第六輯	昭和八年三月三日三陸大海嘯記録	昭和八年三月三日津浪ノ記録
発行者	田老尋常小学校	大槌尋常高等小学校、大槌水産専修学校、大槌実科高等女学校	吉里吉里尋常高等小学校	鵜住居尋常高等小学校	釜石尋常小学校	小白浜尋常高等小学校
発行年	昭和9年9月15	昭和8年6月30日		(昭和15年)	昭和8年4月	
津波史	○	○	○	○	○	○
前兆	○	○	○	○	○	○
被害状況	犠牲者数、各種統計	犠牲者名、統計	犠牲者名	集落ごと詳細状況	県、統計	集落ごと被害集計
支援	見舞、支援一覧	見舞、支援一覧	見舞、支援一覧	見舞、支援一覧	見舞、支援一覧	見舞、支援一覧
避難	津波地震に対する心得。地震の後20～40分で津波。高台避難。高地移転、防潮林、避難路、護岸、記念事業等。	津波被害予防及び地震津浪に対する心得。身一つで家族を連れて、高い所、安全な所に避難。	津波避難、高地避難、朗幼虚弱の率先高地避難一時間は待機	「津浪災害予防に関する注意書」から引用。地震の後20～40分で津波。高台避難。高地移転、防潮林、避難路、護岸、記念事業等。		参考、震災予防評議会編纂津浪災害予防の抜粋。地震の後20～40分で津波。高台避難。
児童作文	○	○	無し	無し	無し	無し

津波に襲われた田老町  
(昭和8年3月3日撮影)



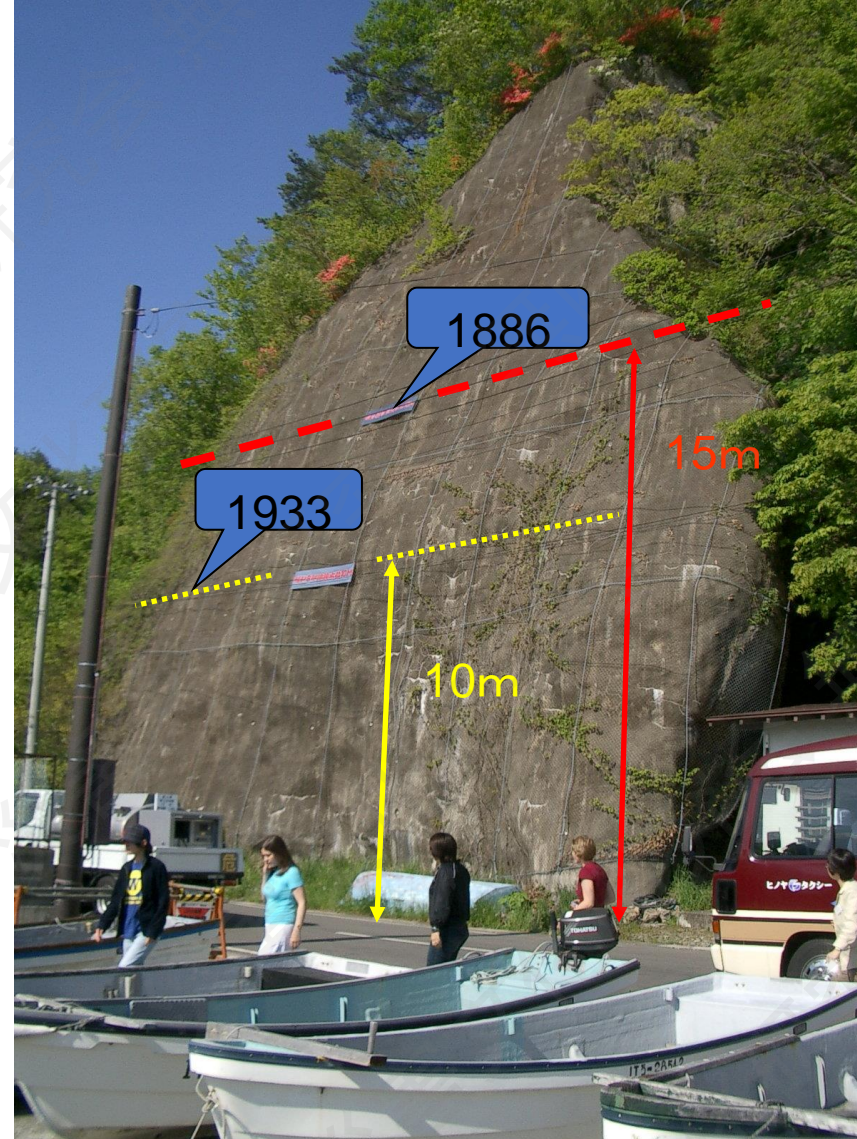
# 破壊された家屋の残骸



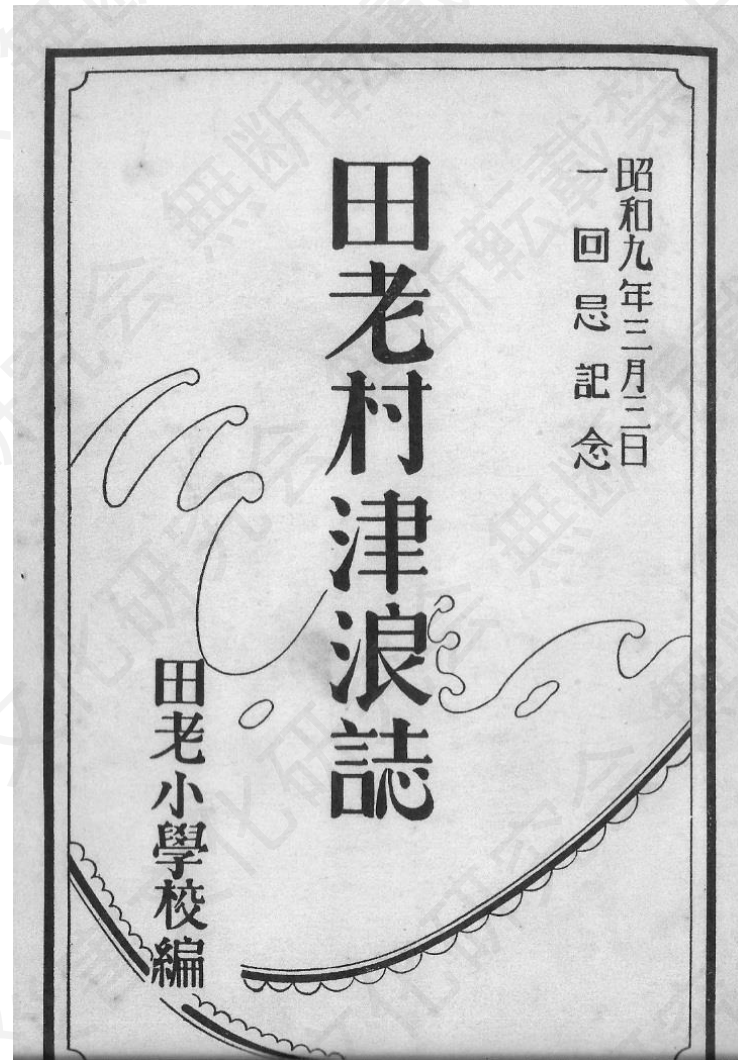
# 田老尋常小学校前に押し上げられた残材



# Marking the Tsunami run-ups (田老の3. 1 1以前の マーカー)

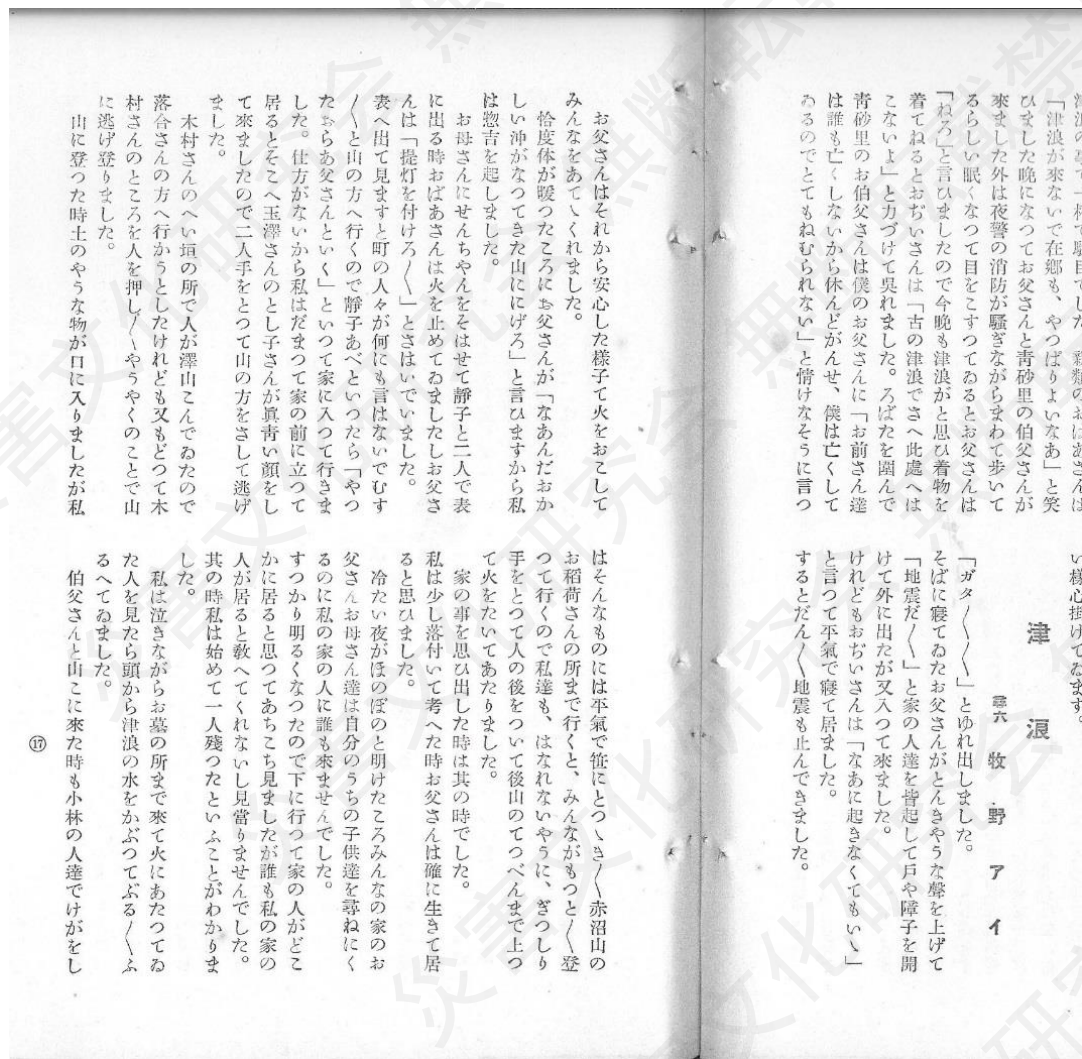


田老では津波誌が津波発生の翌年に編纂



# 田老村津波誌の最後は、児童の綴り方が載る

この津波誌を作家の吉村昭が発見。児童の作文に津波のリアリティをよむ。吉村昭は綿密な津波調査を行う。綴り方を記した少女（牧野アイ）は家族を全員なくし、親戚の世話を頼って、北海道で生活するが、19歳で故郷の田老に戻り、そこで小学校の先生と結婚。吉村昭が調査していた頃は、田老小学校校長夫人になっていた。



お父さんはそれから安心して様子で火をおこして  
みんなをあててくれました。  
恰度体が暖つたころにお父さんが「なあんだおかし  
い沖がなつてきた山ににける」と言ひますから私  
は惣吉を起しました。  
お母さんにせんちやんをそはせて静子と二人で表  
に出る時お父さんは火を止めておまじしたしお父さ  
んは「提灯を付ける／＼」とさはいでいきました。  
表へ出て見ますと町の人々が何にも言はないでむす  
／＼と山の方へ行くので静子あべといつたら「やつ  
たからあ父さんといく」といつて家に入つて行きま  
した。仕方がないから私はだまつて家の前に立つて  
居るとそこへ玉澤さんのとし子さんが真青い顔をし  
て來ましたので二人手をとつて山の方をさして逃げ  
ました。  
木村さんのへい垣の所で人が澤山こんでゐたので  
落合さんの方へ行かうとしたけれど又もどつて木  
村さんのところを人を押し／＼やうやくのことで山  
に逃げ登りました。  
お母さんにはせんちやんをそはせて静子と二人で表  
に出る時お父さんは火を止めておまじしたしお父さ  
んは「提灯を付ける／＼」とさはいでいきました。  
表へ出て見ますと町の人々が何にも言はないでむす  
／＼と山の方へ行くので静子あべといつたら「やつ  
たからあ父さんといく」といつて家に入つて行きま  
した。仕方がないから私はだまつて家の前に立つて  
居るとそこへ玉澤さんのとし子さんが真青い顔をし  
て來ましたので二人手をとつて山の方をさして逃げ  
ました。  
木村さんのへい垣の所で人が澤山こんでゐたので  
落合さんの方へ行かうとしたけれど又もどつて木  
村さんのところを人を押し／＼やうやくのことで山  
に逃げ登りました。

お父さんにはせんちやんをそはせて静子と二人で表  
に出る時お父さんは火を止めておまじしたしお父さ  
んは「提灯を付ける／＼」とさはいでいきました。  
表へ出て見ますと町の人々が何にも言はないでむす  
／＼と山の方へ行くので静子あべといつたら「やつ  
たからあ父さんといく」といつて家に入つて行きま  
した。仕方がないから私はだまつて家の前に立つて  
居るとそこへ玉澤さんのとし子さんが真青い顔をし  
て來ましたので二人手をとつて山の方をさして逃げ  
ました。  
木村さんのへい垣の所で人が澤山こんでゐたので  
落合さんの方へ行かうとしたけれど又もどつて木  
村さんのところを人を押し／＼やうやくのことで山  
に逃げ登りました。

お父さんにはせんちやんをそはせて静子と二人で表  
に出る時お父さんは火を止めておまじしたしお父さ  
んは「提灯を付ける／＼」とさはいでいきました。  
表へ出て見ますと町の人々が何にも言はないでむす  
／＼と山の方へ行くので静子あべといつたら「やつ  
たからあ父さんといく」といつて家に入つて行きま  
した。仕方がないから私はだまつて家の前に立つて  
居るとそこへ玉澤さんのとし子さんが真青い顔をし  
て來ましたので二人手をとつて山の方をさして逃げ  
ました。  
木村さんのへい垣の所で人が澤山こんでゐたので  
落合さんの方へ行かうとしたけれど又もどつて木  
村さんのところを人を押し／＼やうやくのことで山  
に逃げ登りました。

「ガタ／＼／＼」とゆれ出しました。  
そばに寝てゐたお父さんがとんきやうな聲を上げて  
「地震だ／＼」と家の人達を皆起して戸や障子を開  
けて外に出たが又入つて來ました。  
けれどもおぢいさんは「なあに起きなくてもいい」  
と言つて平氣で寝て居ました。  
するとだん／＼地震も止んできました。

はそんなものには平氣で笹にとつ／＼／＼赤沼山の  
お稲荷さんの所まで行く、みんながもつ／＼登  
つて行くので私達も、はなれないやうに、ぎつしり  
手をとつて人の後をついて後山のでつべんまで上つ  
て火をたいてあたりました。  
家の事を思ひ出した時は其の時でした。  
私は少し落付いて考へた時お父さんは確に生きて居  
ると思ひました。  
冷たい夜がほのぼのと明けたころみんなの家のお  
父さんお母さん達は自分のうちの子供達を尋ねにく  
るのに私の家の人に誰も來せませんでした。  
すつかり明るくなつたので下に行つて家の人がどこ  
かに居ると思つてあちこち見ましたが誰も私の家の  
人が居ると教へてくれないし見當りませんでした。  
其の時私は始めて一人残つたといふことがわかりま  
した。  
私は泣きながらお墓の所まで來て火にあたつてゐ  
た人を見たら頭から津波の水をかぶつてぶる／＼ふ  
るへてゐました。  
お父さんと山に來た時も小林の人達だけがをし



吉村昭の本に牧野アイの綴り方が掲載されている



## V 郷土研究（1）

- 1938年師範学校教授要目改正、地理を愛国心の涵養に資すともに地方研究を進め愛郷心の養成に向かう、と規定した。
- 児童・生徒→郷土→国家という同心円状の世界認識構造。矢印の向きを逆に進めれば、国家の意思を個人に注入できると想定したのでらう。
- 文部省は、地理学者・小田内通敏を中心に山梨県をパイロット研究に指定し「総合郷土研究」を短期間で作成。全国への普及を図ったが、その事業の全国展開はみられなかった。
- 岩手県は独自の方法で、「郷土調査要綱」を作成し、各尋常小学校に「郷土教育資料」作成を求める。

## 郷土研究（2）

- 民間の郷土（教育）への関心と教材開発・研究
- 「北方教育社」（秋田）の動き、「北方教育運動」さらに「北日本国語教育連盟」へと進み、「生活綴り方教育」を推進させていく。
- 生活の中から、生活を対象に、・・・当然のことだが、生活にかかわる課題や問題、その本質がどこにあるかが問われる。
- 生活「主義者」というレッテルを貼り、事件をでっちあげる。被疑者の「仕組まれた」調書作成から虚構の姿を浮かばせ、そこにかかわる教員を検挙することで、教員の思想統制を図る「1940年生活綴り方事件」がつくられていく。

# 子どもが生きることが「できない」状況 田老の「郷土教育資料」のこの章の筆者は不明

表3 田老村死亡者年齢別集計

年次		胎児	1	2	3	4	5	6	計	死亡と総数の割合
1932年	男子	6	6	7	2				21	56%
	女子	6	13	6	2			4	31	
	計	12	19	13	4			4	52	
1933年	男子	4	9	8	1	2			24	46%
	女子	2	5	4	2		1		14	
	計	6	14	12	3	2	1		38	
1934年	男子	10	12	6	1				29	58%
	女子	5	10	3	2	2	2		24	
	計	15	22	9	3	2	2		53	
1935年	男子	11	12	5	1		2		31	55%
	女子	7	7	4	1	1	1		21	
	計	18	19	9	2	1	3		52	
1936年	男子	2	4	2	1	1				
	女子	1	6		3	1				
	計									

(注)数値は(自)昭和7年1月1日 (至)昭和11年7月17日

# 乳幼児の死と婦人の生活・労働状況の密接な関係を指摘・そして、教育で変えようと主張

- 臨月でも、肉体的重労働に従事。夫の無理解。
- 妊婦の栄養不足、厳しい食生活、低い漁村の農業生産力。
- 婦人の漁業、農業生産の担い手（重労働）。
- 子育ての困難、泣く子は育つ。赤子を「えんつこ」に入れ薄暗い部屋に寝かせて、母親は働きにでる。・・・くる病。
- 離乳食という概念を持たない、持たない。…消化器の病気。
- 漁家の家事を取り仕切るのは、姑。嫁は労働力、子どもを産む役。
- 病気になっても医者にかかることはできない。

## VI おわりに

- 1930年代、「弱いもの」の立場や発言を明らかにし、そこから世界・地域を見ることはむづかしい。しかし、資料の断片にその「声」を聴くことが出来る。
- 『田老津波誌』（1934年）に掲載された児童の綴り方。孤児になった児童が歩んだその後の人生。田老という地域では津波防災の生活。
- 『田老郷土教育資料』（1940年）に記された田老の乳幼児の死亡の実態と婦人の生活実情。それを改善しようとする家事科教員の意欲。
- しかし、戦争が進み、また平成の大津波が発生。さらに、教師が地域に学ぶという視座は「戦時下」に比較して成長したのか。

**ご清聴 ありがとうございます**

•

**山崎 憲治**